

ほのぼの

第4号

平成15年
7月

発行

神戸市須磨区戎町1-2-3
TEL 078-732-5209
信行寺門信徒会

第二回

信行寺門信徒会総会



総会の模様

朝から好天に恵まれた、四月二十六日午後二時から信行寺二階礼拝堂で七十余名の出席者で総会が開催されました。

最初に、おつとめ(十二礼)から始まり、「真宗宗歌」を、森本先生の伴奏で合唱する。

司会は川口昭次氏で、藤本顧問からは、門信徒会に対するご協力への謝辞がありました。議長には、月田幹雄氏を選出し、議事に入り、平成十四年度、事業報告および平成十五年度事業計画案が、松井副会長から説明、提案され、満場一致で承認されました。

引き続き、平成十四年度決算報告と、平成十五年度予算案が、石田会計委員から説明、提案がありいずれも、満場一致で承認され、議事が終了しました。

議事終了後、長井副会長から、門信徒会の各種事業に対する協力依頼、特に年間行事への参加と、毎月の行事への参加をしていただきたいとの、お願いがありました。

このあと、住職から法話があり午後四時に閉会となりました。新年度も皆さんの暖かいご支援で門信徒会がさらに飛躍することを期待しております。



無量寿のいのちを生きよう



住職 米田睦雄

わたしはこれまででたくさんの方の葬儀に立ち会いました。

そのなかで百歳を越えていた人は三人です。

Aさんの場合、百歳と三ヶ月、お嫁さんの腕のなかで息を引取られ、お世話をされたお嫁さんが「もう少し生きてほしかった」といわれたのには感心し、教えられました。お嫁さんの口からこんな言葉が出るのは、姑であるおばあさんもスバラシイし、お嫁さんもスバラシイからです。

Bさんの場合、百歳と七ヶ月。主人が戦死されたあと、残された子供を育て上げました。若いときからご法義に篤く、時間をつくっては聴聞に励まれ、お念仏を喜ぶ尊い一生でした。

Cさんの場合は、百歳と四ヶ月、亡くなられる二十日前までは人手を借らずにトイレをし、子供たちになるべく迷惑をかけまいとして、リハビリに努めておられたのには頭が下がります。お世話をされた家族みんなが、その頑張る姿を見て、あんなに頑張っているのだから、われわれも頑張らなければと、随分に勇気づけられたそうです。

この三人に共通していることは、①平生から元気で、②頑張り屋、そして③「ありがとう」と何事にも感謝する。④信

仰心があり、⑤特別に教えてはいないのに、周りのものに多くの事を学ばせていることです。

「せんせい（先生）」は「先に生まれた」と書きます。それは、後から生まれたひとは、特別に教えてもらったわけではないけれど、先に生まれたものから、人生の肝要を学んでいるからです。

「健康には十分注意し元気でいよう。努力が大切。物事を成し遂げようと頑張り、なにごとくも感謝のこころで受けとめる。他人にしてあげたことをあれこれ思うよりも、自分がしてもらったことを知ることが大切。人生は七転び八起きだよ。そんなことでくじけるなヨ。如来さまがいつも一緒なんだからなにも心配することはないヨ」と、百年生きた人の生きざまは、そのまま人生の肝要を教えてくれています。

人のいのちは、この世に生まれてからの五十年、百年だけのように理解されていますが、お念仏に生きるひとはそうではありません。つまり、五十年、百年のなかの今日一日ではなく、無量寿といわれる限りなきいのちの今日一日を生きているのです。ここが非常に大切なところです。無量寿のなかの五十年、百年です。したがって、いつ、なん歳で倒れても無量寿のいのちを生きています。如来さまが無量寿の仏さんであるだけでなく、救われるわたしたちも無量寿のいのちをいただくのです。お念仏を聞き、お念仏を申しましょう。

若い人に来てほしいのですー。

信行寺副住職 米 田 恵 悟

毎月一回、仏教青年会をするようになって二年になります。はじめは、私を含めて二、三人ではじめた集まりが、今では八人になりました。二十代、三十代の若い人がお寺に仏法を学びにくるということは、有難いことであります。お寺の行事に参加する若い人が少ないため、「若い世代の人が気楽に足の運べる集まりができたらいいなあ」という思いから始めました。科学万能の価値観に慣れすぎて、宗教教育のない日本に育った若い世代に仏教の世界観がどう受け取られるのか、疑問や意見などを気軽に発言してもらい、少人数ならではの参加型の会にしています。

以前、熱心なご門徒の方が入院されていた時、お見舞いに行つたことがあります。ベッドの上で横になりながら私の手を握り、「若い人に仏法を伝えてくださいなあ」と言われたことが、今でも胸深く響いています。実際、仏縁のある人がお寺に法話を聞きに来るのでしようが、本当に稀有なことではありません。人間界に生を受けるのさえ簡単なことではない。そのなかでも仏の教えに遇うのは本当に難しい、といわれています。

すべてがめまぐるしく移り変わる、今の時代。何がよくて、何が悪いのか分からない、心の迷いと不安。その只中に、いつの時代も変わらぬ真実の教えがまだあることがなにより心強いことあります。仏教に興味のある人が、気軽に集い、仏縁を喜ぶ人がひとりでも増える機会になればと願つております。

質問コーナー

住 職

問
答

「お盆」についておたずねします。

お盆は、仏教を信ずる人々が、生んでくださった母親を中心に、ひろくわたしたちを育て、導き、護つてくださったかたがたの御恩を思い出し、感謝し、忘れないうようにする日として行われてきた大切な行事です。

お経によりますと、お釈迦さまのお弟子で、神通力第一の目蓮尊者が、餓鬼道に落ちて、真つ逆さまに吊るされるような苦しみを受けているお母さんを、なんとかして救いたいという一心で、お釈迦さまにおたずねしました。

お釈迦さまはおっしゃいました。「母親の罪は非常に重いから、多くの僧侶の力を借りるより方法はない。四月の十五日より七月十四日までの九十日間の修行が終わった次の日の七月十五日（旧暦）（新暦八月十五日）」、多くの僧侶に供養しなさい。

そうすれば、現在の父母だけではなく、遠い過去の父母も、縁のつながるすべてのひとびとも、苦しみから逃れることができる」と。

目蓮尊者は、お釈迦さまの仰せのとおり僧侶を供養し母親を救うことができました。

目蓮尊者の物語は、わたしたちに、「親の恩を忘れてはいないか」と、問いかけています。親は餓鬼の世界に落ちる思いの中で育ててくれたのです。





参拝旅行・教得寺（妙好人 五助碑前にて）

研修旅行記

川口昭次

五月八・九日、参加者十九名は「広島我真宗ゆかりの寺院参拝と安芸の宮島を訪ねて」の研修旅行の機会に恵まれました。

出発時には、時々強い雨が降って一時はどうなる事かと心配されましたが、幸い途中から小降りになり、やがて午後から曇り空となつて、翌日は五月晴れの天気で、楽しい旅行となりました。

最初のお参りは千代田町の教得寺で、ここは妙好人の五助さんゆかりのお寺です。無学の農夫であつた五助同行の、信仰に生き抜く逸話には感銘深く拝聴しました。

次に可部の勝円寺さんにお参りました。同寺第十二世住職の真実院大瀧（だいいい）和上の事蹟を学ばせて戴きましたが、親鸞聖人のみ教えは「阿弥陀如来のお心を頂くこと」ですが、「間違つた教えを払めようとしている人々」と対決して、病床にあつた和上は身命を培つて真実のお念仏を護りぬかれました。和上は四十五歳の若さで入寂され、今年の五月四日に二百回忌法要が勤修されました。私達が、今日こうして「本願の正意」を聴聞させて戴く事が出来るのも、ひとえに「だいいいさん」のご苦勞のお蔭であります。

その日は、宮島口の安芸グランドホテルに泊まり、夕食時

の宴会では大いに盛り上がり、和気あいあいのひとときを過ごしました。

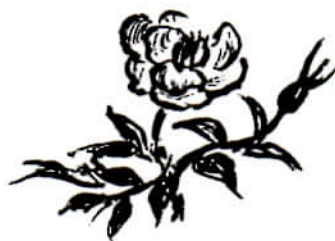
翌日は宮島に渡り、世界文化遺産の厳島神社を拝観。十一年振りにペンキを塗り替えられた大鳥居の華麗な姿を目の辺りにし、もみじ饅頭・おしゃもじ・民芸品などのお土産もいっぱい買いました。買いた物が余りにも多すぎて、宅配便で送った人もいたとか…いかなかったとか…?。

次いで広島市に戻って、西向寺にお参りしました。このお寺は、原爆ドームと道一つ隔てた所にあつて、高松梧峰（ごほう）和尚が住職をされていたお寺です。同寺は原爆で焼失してしまつて、今は鉄筋造りで立派に再興され、昔を偲ぶ面影はありませんが、和尚が生前に「真宗学寮」を創設して浄土真宗のお念仏の普及に務められました。

和上の荒げた声を聞いたこともなく、怒つた姿を見たこともない。お念仏のみの天性柔和なお方であつたとのこと。昭和十四年七十四歳で入寂されました。

昼食後は、原爆ドームと平和記念資料館を見学しました。被爆者の遺品や、被爆当時の惨状の写真などが展示されており、平和な社会の大切さを痛感させられました。

お蔭様で無事故での楽しい旅行に恵まれました。（合掌）



毎月の行事 信行寺

毎月第一日曜日 午後二時より

護法会法座 「蓮如上人御一代記聞書のお話」

毎月第二日曜日 午後七時より

仏教講座 「教行信証のお話」 住職

毎月第三土曜日 午前十時より

仏教讃歌のつどい コーラス みやび会

毎月第三土曜日 午後二時より

定例聞法のつどい 法話 住職

法義示談（信仰相談） 住職

青少年心の相談室

（仏法の質問に応じます） 副住職

月一回日曜日 午後四時半〜六時半まで

仏教青年会 副住職



|| 夏期特別法座のご案内 ||

今年は二十一回目の法座になります。

皆様お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますよう、お願いいたします。

◎とき 八月十七日(日)

十一時～十五時

◎ところ 『シーパル須磨』

須磨水族園を西へ二〇〇メートル

◎法話 信行寺住職

●法題「救い」

◎会費 四、〇〇〇円(昼食代込み)

当日の納入でも結構です。

◎申し込み方法 電話でもお申し込みください

(TEL 〇七八ー七三二ー五二〇九)

文芸欄

◆投稿◆俳句

桐の花 昔を語る 門残り

梅雨籠こもり 老ゆれば惚ぶ 人の増え

杖を曳ひく 人に片陰 また途切れ

不義理みな 暑さのせいに しておりぬ

吾が家の 風鈴の音に 旅終る

木下美津恵



感謝の言葉

『ありがとう』

『ありがとう』という言葉は、一般的には感謝やお礼の心を表す日常用語として使われています。そこで、この言葉に関連したものを、辞書で調べてみました。

◎ 「有り難し」(岩波社の古語辞典)

① 有ることを欲しても、なかなか困難で実際には少ないこと。「無い」の意。

② 稀なことを喜ぶ気持ちのこと。

◎ 「有り難い」(学研社の常用国語辞典)

① 嬉しい。(うれしい)

② 勿体ない。(もったいない)

③ 忝ない。(かたじけない)

④ 畏れ多い。(おそれおおい)

⑤ 尊い。(とうとい)

「有り難い」ということは、文字通りに、「有ること難い」「滅多に遇うことがない」という意味です。だから、「そんな

に稀なことに遭遇した」のだからた、「嬉しい・勿体ない・忝ない・畏れ多い」という感謝の気持ちとなるのです。

「あの時、あの人に出会わなかったら、今の私は有り得なかつただろう」。私が今ここにいるのは、本当に不思議なことなのです。

私達は「明日も明後日も、同じような日が続く」と思っていて日々を暮らしていますが、人生の本当の姿は、「無常」なのです。

私達は「無常が当たり前のこと」であるのに、それを「おかしい」と思わないで、又、今日一日「平常」で過ごせたことは、「有ること難き素晴らしいこと」であるのに、それを「当たり前のこと」と思っています。

今日、生きている私の「へのち」を、「当たり前のこと」と思わず、「有り難いこと」と感じる「へこころ」が、大切だと思えます。

いつでも誰にでも、素直に『ありがとう』と言えるようになりたいものです。

